

## 2009 年度自己点検・評価報告書

## 〔文学研究科〕

## 学生の受け入れ

## (学生募集方法、入学者選抜方法)

## 大学院研究科の学生募集の方法、入学者選抜方法の適切性

文学研究科全体として、博士前期課程(含む修士課程)の入学定員は58名であり、収容定員は101名である。後期課程の入学定員は16名であり、収容定員は48名である。(学生定員および在籍学生数に関しては、添付の「表18」参照)

前期課程の学生募集は、「学内選考」、「一般(第Ⅰ期)」「(全専攻)」、「一般(第Ⅱ期)」「(国際言語教育専攻の英語教育専修のみ)」、「一般(第Ⅲ期)」「(臨床心理学専修のみ)」を行なう。

博士前期課程は、外国人を対象にした外国人学生入試も実施している(教育学専攻臨床心理学専修と国際言語教育専攻を除く)。選考方法は、各専攻とも第1次(書類審査)、第2次(専門科目の筆記試験と口述試験)である。

後期課程の学生募集は、国際言語教育専攻を除く4専攻において「進学選考/一般」を行う。

なお、2011年度入試(2010年度に実施)からは、2月に博士前期課程・修士課程の全ての専攻が一般(第Ⅲ期)を実施することが決定している(国際言語教育専攻英語教育専攻を除く)。

以下、各専攻について述べる。

〔英文学専攻〕 前期課程の試験科目について。外国語は、フランス語またはドイツ語から1言語を出願時に選択する。ただし、外国人には課さない。辞書は使用可で、貸与される。専門科目は、①専攻共通問題(一般的な英語問題)、②専修共通問題(専門的な英語問題)、③イギリス文学、アメリカ文学、英語学、比較言語論のうちから1科目選択(出願時に選択する)、の計3科目である。辞書は使用不可である。および面接を行なう。

後期課程の試験科目について。学内からの「進学選考試験」の場合は書類選考のみである。「一般入学試験」は、外国語として英語(辞書不可。また、外国人の場合は専門科目として内容を異にする)、フランス語またはドイツ語から1言語を選択(辞書不可)、および口頭試問(専門科目を中心)である。募集および選抜方法は適切であると考えられる。

〔社会学専攻〕 博士前期課程の試験科目は外国語(英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語から1ヶ国語を選択)、専門科目(社会学専修、グローバル・スタディーズ専修ごとに出題)、および面接である。

博士後期課程は「進学選考試験」「一般入学試験」とも試験科目は外国語(英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語から1ヶ国語を選択)と口頭試問である。この口頭試問は専門科目についての質疑を中心に行っている。前期課程、後期課程ともに、募集方法および選抜方法は適切と思われる。

〔教育学専攻〕 博士前期課程は、筆記試験（外国語（英語）と専門科目）と面接である。前述の通り、臨床心理学専修のみ2月中旬に第3回目の試験を実施している。外国人には、外国語を免除している。

博士後期課程は、「進学選考試験」「一般入試」とも、外国語（英語）の筆記試験と口頭試問である。

学生募集については、臨床心理学専修では、民間の予備校とも連携をとり、アピールを積極的におこなうなどして、他大学出身の学生を確保できるように、鋭意、受験情報の公開を、積極的におこなっている。総じて、学生募集方法および入学者選抜方法は適切であると思われる。

〔人文学専攻〕 博士前期課程においては、「学内選考試験」、「一般入学試験」とも、試験科目として外国語（英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語のうちから1科目選択）、専門科目（専修ごとに出題）、および面接（口述試験）を課している。外国人に関しては外国語を課さないこととしている。

博士後期課程の入学試験は、哲学歴史学専修においては、「進学選考試験」、「一般入学試験」とも、試験科目として外国語（英語のほか、ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語のうちから1科目選択の計2科目。ただし、歴史学の中で日本史を志望する場合には、2科目のうち1科目は「古文書学」で代えることも可）、および口頭試問を課している。哲学歴史学専修では、外国人が受験する場合は、母語以外の2ヶ国語を選択することとし、外国語に日本語を加えることもあるとしている。日本文学日本語学専修の後期課程入学試験については、外国語科目はなく、専門科目に専修共通問題および同選択問題を出題し、および口頭試問を課している。

前期課程、後期課程ともに、学生募集の方法および入学試験に関しては適切である。

〔国際言語教育専攻〕 日本語教育専修は、2009年度に新たに文学研究科に増設され、初年度の募集では、2度の一般入試を実施した。試験科目は、外国語（英語・中国語・日本語から1科目選択）と専門科目（日本語学・日本語教育）と面接である。大学卒業後4年以上経過している社会人は、外国語が免除された。その結果、5人の社会人が入学した。社会人にやや有利な試験方法となったという反省もあり、2010年度の募集では、現役・社会人を問わず、外国語科目を課すことに変更し、新たにドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語を追加した。日本語を母語としない人を対象とする日本語教育では、教える側の外国語学習経験や外国語に対するセンスが問われる場合があるからである。この変更は概して適切であったと考える。募集方法については、海外からの応募への対応や、出願期間などの点で、受験生にとって応募しやすい募集方法を今後も継続して検討する必要があると思う。

英語教育専修では、創価大学からだけでなく、他大学、海外からも学生を募集することが専修の発展に不可欠の要素と考えている。現在は、新しい専修であるため、学生募集の情報については学内の事務局、在学中の院生、教員から志願者に伝えられている。

入学者の選抜は、現在、本専修を希望する理由を書いたエッセイ（日本語と英語）、TOEFLまたはIELTSのスコア、及び英語による面接で行っている。試験当日は、面接のみのため、そのメリットを生かし、外国に在住する受験者はスカイプ等を使用しての受験が可能となっている。2009年度に実施した入試（2010年度入試）では1名がこの方法で

受験をした。現在はこの方法で特に問題はないが、将来は面接を行う際同時に英語のライティング試験を含めたいと考えている（英語が母語でない志願者のみ）。

開設1年目である平成21年度、入学者は6名であった。国際言語教育専攻の定員は、日本語教育専修と合わせて15名である。故に、本専修には全定員の半分をやや下回る数の院生が在籍している。今後は本専修の入学者数を増やしていきたいと考えている。

学生募集の広報も、今後新しいパンフレット作成や、新聞広告の掲載等を予定しており、積極的に取り組んでいきたいと考えている。

#### （学内推薦制度）

**成績優秀者等に対する学内推薦制度を採用している大学院研究科における、そうした措置の適切性**

文学研究科では、学内推薦制度を採用していない。ただし、一般入試のほかに学内選考試験を設けており、適切な措置だと考えている。

#### （門戸開放）

##### 他大学・大学院の学生に対する「門戸開放」の状況

他大学・大学院の学生は、一般入試で受験することができる。過去問題など入試情報を開示するなどをして、他大学・大学院の学生も同等に受け入れている。

社会学専攻では、人数に関して「学内選考試験」での合格者を抑制することで、「一般入学試験」において他大学・大学院の学生が合格できる余地を確保してきており、実際に、ここ数年は留学生も含めて毎年、他大学出身の学生を受け入れている。教育学専攻臨床心理学専修では、例年、何名かの他大からの合格者を出している。臨床心理学専修の平成21年度の入学者は、7名中1名が他大学出身である。また、臨床心理学専修の平成22年度の入学者も、既に10名の合格者のうち、2名の他大学出身者の合格を決定している。国際言語教育専攻日本語教育専修では、入学者のほとんどが、創価大の卒業生、あるいは交流協定のある外国の大学の出身者である。外向けにも積極的な広報活動を行い、他大学出身者の受験を促し、その比率を高めてゆく努力も必要ではないかと考える。

#### （飛び入学）

**「飛び入学」を実施している大学院研究科における、そうした制度の運用の適切性**  
本研究科では、飛び入学は実施していない。

#### （社会人の受入れ）

##### 大学院研究科における社会人学生の受入れ状況

社会人枠は設けていないが、博士前期課程の社会学専攻、教育学専攻、人文学専攻では社会人には外国語を免除するという措置を行っている。出願の段階で4年大学卒業後満4年以上経過している者が該当する。臨床心理学専修の場合は、満5年以上経過している者が該当するが、5年未満であっても27歳以上の者は出願時に申請書を提出し認められた場合は、社会人として受験することができる。毎年数名が社会人として受験をしている。

**(外国人留学生の受け入れ)****大学院研究科における外国人留学生の受入れ状況**

留学生の本国地での大学教育、大学院教育の内容・質の認定の上にあった、大学院における学生受入れ・単位認定の適切性

2009年度入学の外国人留学生は、社会学前期課程2名および後期課程1名、教育学専攻前期課程1名、後期課程1名、国際言語教育専攻日本語教育専修3名、人文学専攻後期課程2名である。

日本語教育専修の場合、3名の中国人留学生が入学したが、外国語として日本語を学習した経験をもつ留学生は、日本語に対し新鮮な観点や意見を持っており、日本語を母語とする院生にもよい刺激となっている。留学生にとっても、母語話者の院生と同じ土俵で議論できる授業やゼミは、日本語や日本語教育に対する知識を磨くための理想的な環境となっている。

**(定員管理)**

**大学院研究科における収容定員に対する在籍学生数の比率および学生確保のための措置の適切性**

**著しい欠員ないし定員超過が恒常的に生じている大学院研究科における対応策とその有効性**

英文学専攻の前期課程では、収容定員20名に対して在籍数8名で40%、後期課程では、収容定員15名に対して在籍数6名でやはり40%である。学生確保としては、2008年度より「院生研究報告会」を開催し、執筆中の修士論文の紹介や現在の研究の紹介を学部生に対して行ない、大学院進学をアピールしている。また、学年末に選抜試験を行ない、受験の機会を年3回に増やすことを検討している。英文学専攻では、著しい欠員とまではなっていないと思われるが、上で述べた「院生研究報告会」などを通じて、院生と学部生の交流を深め、大学院に対する興味を身近な先輩を通して持ってもらうなどの対応策は有効であると考えている。

社会学専攻の博士前期課程の学生数は、収容定員20名に対して12名、比率(充足率)は60%である。また博士後期課程では収容定員15名に対して8名の学生が在籍しており、比率(充足率)は53%となっている。前期課程、後期課程とも充足率は低く、適切とは言えない状況にある。学生確保のためには入学試験の回数を増やしたり、入試の時期を学生の進路決定時期に考慮してずらすなどの措置が必要であり、こうした方向での改革を速やかに行っていきたい。前述した入学試験の改革とともに、学部学生に対する大学院の説明会を開催するなど、学生確保のための対策を行ってきているが、さらにこうした努力を重ねていきたい。

教育学専攻の場合、博士前期課程では、定員15名に対して、21名が在籍しており、臨床心理学専修を中心に、若干の定員超過が認められるが、授業および研究指導の面で、特に問題は報告されていない。博士後期課程では、定員2名に対して、2名の在籍者がおり、問題はない。

人文学専攻博士前期課程の学生数は、収容定員16名に対して在籍者数9名であるから、収容定員に対する在籍学生数の比率(収容定員充足率)は56.3%である。また、博士後期

課程の学生数は、収容定員 12 名に対して在籍者数 10 名であるから、収容定員に対する在籍学生数の比率（収容定員充足率）は 83.3%である。博士後期課程についての上記充足率はまずまずのものとするが、博士前期課程については収容定員に対する在籍学生数の比率はやや低い。今後、人文学に対する学生の関心を高め、充足率の向上を図ることが必要であろう。

国際言語教育専攻では、定員 15 名のところに、日本語教育専修 11 名、英語教育専修 6 名、計 17 名で、適正であるとする。